

聖書:士師記1章1～15節

説教:エルサレムを取る

はじめに

これからしばらく士師記を見てまいります。
まず士師記の時代から。モーセがエジプトからイスラエルの民を救い出し、約束の地カナンを目指したのは紀元前のおよそ千四百年頃と言われます。しかし、ご存じのとおりですが、彼らはすぐにカナンの地には入れたのではなく、四十年間荒野をさまようこととなります。モーセは約束の地を目前にして亡くなり、その後を継いでリーダーとなったのが若いときからモーセの下で訓練を受けていたヨシュアでした。彼はモーセに代わってイスラエルを率い、ヨルダン川を越え、城壁に囲まれたエリコを攻め落とし、念願のカナンの地に導き、十二部族にそれぞれ領地を割り当てました。しかし割り当てたとは言っても、まっさらな土地がそこにあつたのではない。そこにはカナン人が住んでいて、よそからやってきたイスラエル人にことごとく刃向かってくる。まだまだ問題が山積みだつたのです。そんなさなかにヨシュアは百十歳で亡くなります。その亡くなった後、イスラエルはどうなつたか。それが士師記に書かれていることです。

1 ヨシュアが死んだ後

1) さばく者がいない

どの時代でも指導者の交代は、平和な時であつても簡単なことではありません。ましてこのときは目の前に自分たちを受け入れようとしぬ敵が待ち構えているのです。すぐにでもヨシュアに代わる指導者を立てなければ大変だ。だれもがそう考えます。モーセは死ぬ間際にヨシュアを自分の後継者に指名していたので、指導者の交代は円滑に進みました。ところがヨシュアは自分の後継者を指名しないまま亡くなってしまった。これは困つた。そこでどうしたか。1節です。「ヨシュアの死後、イスラエルの子らは主に尋ねた。『だれが私たちのために最初に上って行って、カナン人と戦うべきでしょうか。』」

イスラエルに王さまが立てられるようになったのは士師記の時代のずっと後のことです。それ以前は、指導者として「さばきつかさ」とよばれる人が立てられていました。この「さばきつかさ」が士師記の士師の意味です。

それはよいとして、問題はさばきつかさをどのようにして選ぶかです。選挙で決めたのではない。あ

るいは主だった人たちが集まって議論して指導者を決めたのではない。彼らはこのとき主に尋ね求めました。このように聞いて皆さんは、イスラエルは神の民なのだから当然のことでしょう、と思うかもしれません。

2) 主を知らない世代

しかし2章8～10節にこう書かれているのです。「主のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。人々は彼をガアシュ山の北、エフライムの山地にある、彼の相続地の領域にあるティムナテ・ヘレスに葬った。その世代の者たちもみな、その先祖たちのもとに集められた。そして彼らの後に、主を知らず、主がイスラエルのために行われたわざも知らない、別の世代が起こつた。」

イスラエルも世代交代が進み、主を知らない人たちが、主がイスラエルのために何をしてくださつたのか直接経験したことのない人たちが増えていった。ヨシュアが亡くなったとき次の指導者はだれでしょうかと主に尋ね求めたのは、古い世代の人たちがまだ元気だつたからできた。若い世代はそうではない。イスラエルはこのような過渡期を迎えていました。

今回、士師記を選んだ理由はここにあります。この教会が建てられて今年の春で17年となります。私もそうですが、開拓の初めから労してくださつた兄弟姉妹もじょじょに年齢を重ねてきて、次の世代を育てなければならぬ、そのような過渡期を迎えていると感じております。そのとき聖書の人々はどのようにして、この困難を乗り越えて行つたのか。そのことをともに学ぶことができると願っております。

3) ユダとシメオン

聖書に戻りますが、人々の祈りに対して神はどのように答えられます。2節。「ユダが上って行くべきである。見よ、わたしはその地を彼の手に渡した。」このようにしてユダが選ばれ、自分の兄弟であるシメオンと同盟を結んでカナン人と戦い、彼は大きな戦果を挙げていきます。そのなかでも最も大きかつたのは8節に書かれていることだろうと思われまふ。8節。「ユダ族は、エルサレムを攻めてこれを取り、剣の刃で討つて町に火を放つた。」

2 救いを備える神

1) 場所：エルサレム（第二サムエル記24章21節）

なぜエルサレムに注目するのでしょうか。この時代からおよそ三百年後、ダビデはイスラエルの王となってエルサレムを都として定めます。そのときかれは大きな罪を犯します。イスラエルの民は神のもので、王が自分の欲のために人口調査をすべきではなかったのに、彼は強引に人口調査をさせてしまう。その結果、神の怒りがダビデに下りました。やがて罪を告白したダビデが祭壇を築いたその場所がエルサレムの丘の上です。彼はエブス人アラウナが持っていた土地をお金を出して買い取って祭壇を築く。後にダビデの子ソロモンがそこへ神殿を建てていきます。そして今度は、ダビデの時代からおよそ千年経ったとき、イエス・キリストがエルサレムに来られ、ゴルゴダの丘で十字架におかかりになっていくのです。これでおわかりでしょう。神はご自分のひとり子が十字架におかかりになる場所をちゃんと定めておられるのです。イスラエルの歴史の中で何千年にもわたってその場所を用意していかれた。そのことがここに記されています。

2) 人：ダビデの家系（ルツ記1章1節）

また、神はただ場所を用意しただけではなく、ここには直接には登場してきませんが、イエスにつながる人々がこのさばきつかさの時代に起こしていきます。士師記の次に置かれているルツ記1章1節にこうあります。「さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの町に行き、そこに滞在することにした。」この二人の息子のうちのひとりが現地の女性であるルツと結婚するのですが、おそら病気が何かで男性たちは死んでしまい、ルツと姑のナオミだけが残ってしまう。そんなルツが数奇な運命をたどりながら、ダビデにつながる子どもを産んでいき、そのダビデの家系からやがてダビデの子イエス・キリストがお生まれになるわけです。

こうして見てくると、士師記がイエス・キリストとどんなふうに結びついているのか、おわかりいただけるのではないのでしょうか。

3 カレブ

1) ヨシュアとともに主の約束を信じる

とは言え、今日の箇所は戦争のことばかりで、信仰のことはほとんど触れられていないように思

うかもしれません。しかし、12節に登場するカレブに注目したいと思います。カレブとは何者なのか。話は、イスラエルの民がエジプトから逃れて荒野を旅していた最初の頃にさかのぼります。人々は一度カナン地の近くまで来たときのことです。さあこれからどうするか。まずはカナンの地がどんな様子でどんな人たちが住んでいるか偵察しようということで、十二人の精鋭部隊を派遣します。そのなかにいたのがヨシュアとカレブ。偵察から戻ってきて報告するのですが、ヨシュアとカレブ以外の十人は全員、あそこには非常に強そうな人たちが住んでいてとても勝ち目がないのでエジプトに戻ろうと非常に悲観的なことを言いだすわけです。ところがヨシュアとカレブだけは、反対意見を述べます。民数記14章8、9節前半。「もし主が私たちを喜んでおられるなら、私たちをあのに導き入れ、それを私たちにくださる。あの地は乳と蜜の流れる地だ。主に背いてはならない。」

このように強く主張したために、殺気立っていた人々からあやうく二人は殺されかけるのです。それでも意見は曲げなかった。そんなヨシュアとカレブは、おそらくその後ずっと信仰の友として励まし合ってきたでしょう。

2) 世代交代の道を備える

いまヨシュアは天に召され、神の奇蹟を経験した最後の世代であるカレブが約束の地に招かれたときにしたことは次のことでした。12、13節。「そのときカレブは言った。『キルヤテ・セフェルを討って、これを攻め取る者に、私の娘アクサを妻として与えよう。』カレブの同族ケナズの子オテニエルがそれを攻め取ったので、カレブは娘アクサを彼に妻として与えた。」

よく戦国時代の戦いの場面にも出て来そうな話ですから、ここもそんな話の一つだろうかと思ひ過してしまいかも知れません。しかし、カレブの娘アクサの夫なったオテニエルはこの後どうなるのか。彼はやがてイスラエルの最初のさばきつかさとなるのです。そうしますと、カレブは何をしたことになるのか。神の民であるイスラエルの先頭に立って戦う指導者を選び、次の世代にバトンタッチし、世代交代を成し遂げていったことになる。カレブが選んだわけではありません。神がオテニエルを選び、志を与えて前に一歩踏み出させた。このようにして、神の救いのご計画が目に見えない形であっても着々と進められていきます。

私たちは神の救いをいただいておりますが、現実に関心すれば、いろいろな問題が立ち塞

がっているように見えるでしょう。神はどこにおられるのか、手ごたえを感じるができない。神の助けを感じられないということもときにはあるでしょう。イスラエルも同じでした。際だった指導者が次々と召されていく。いったいこの国はどうなるのか。そんなときでも神はひとり一人の信仰を通して確実に道を備えてくださる。そのことを知ることができます。この一年も、神に導かれて歩んでまいります。